様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年　3 月 31 日現在

機関番号：32686
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2008　～　2010
課題番号：20720089
研究課題名（和文）２０世紀と２１世紀のフランス現代文学を通して見た日本文化について

研究課題名（英文） Japanese Culture through the 20th and 21st Centuries of French and Francophone literatures

研究代表者　アムール＝マヤール・オリビエ（Ammour-Mayeur Olivier）
立教大学　・文学部・　助教
研究者番号：20422181

研究成果の概要（和文）：この３年間では私は特に、次の３つの主たる目的を設定した。まず第一には国際シンポジウム「ミシェル・ビュトール　－　境界にて、あるいは移動の芸術」を開催することである。シンポジウムの目的は、ビュトール作品にみられる日本文化の影響を明らかにすることであった。研究の２つ目の目的は、フランス現代作家の作品にみられるアジア文化の影響、特に日本文化の影響について、書物を準備・刊行することであった（『ノマドのエクリチュール　－　フランス作家と極東』）。研究の３つ目の目的は、上記シンポジウムの成果に基づく、共著を出版することであった（『ミシェル・ビュトール　－　境界にて、あるいは移動の芸術』、ディジョン大学出版局）。

研究成果の概要（英文）：I had planned three major goals to achieve. The first one was to organize an international symposium on the French writer Michel Butor: “Michel Butor - À la frontière ou l’art des passages”. Its main goal was to underline the connections existing between Michel Butor’s work and Japanese culture. The second goal was to publish a personal book about the influence of Asian cultures, and especially the Japanese one, on some major contemporary French writers (*Écritures nomades : Écrivains français et Extrême-Orient*). The last goal was to publish a collective book based on the Michel Butor’s symposium conferences (*Michel Butor - À la frontière ou l’art des passages*).

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	2,500,000	750,000	3,250,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：　人文学
科研費の分科・細目：　文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）
キーワード：フランス文学、比較文学、文学一般、文学論、美学

１．研究開始当初の背景

研究開始まですでに８年にわたり私は、フランス現代作家の作品にみられるアジア文化の影響、特に日本文化の影響について研究を進めていた。そしてすでにいくつかの論考を発表していた。一般に、こうした研究は、マルセル・プルースト、ピエール・ロチ、ポー

ル・クローデル、ロラン・バルト、マルグリット・ユルスナールといった限られた作家とその作品を中心に進められる傾向があった。そしてそうした傾向が、日本文化の影響という問題に関心を持つものにある、特別な先入観を植え付けてきたといえる（単純化すればそれをオリエンタリズム、エクゾティスムと呼ぶことができる）。例えばジャポニスムがプルーストに与えた影響、ピエール・ロチの植民地主義的視点といったものがその典型例であり、それらは繰り返し論じられてきた。しかしながら、実際には日本文化の影響はとうていこうした作家に限定できる単純な問題ではない。他の２０世紀のフランス作家も程度の差こそあれ、日本文化の大きな影響を受けているのである。以上のような観点から私は、コーパスを広げ、こうして先入観を打ち破り、乗り越える必要があると感じていた。すなわち、影響関係についての新たな研究の必要性である。

２．研究の目的

本研究は上記の研究を、これまでこうした研究によって扱われることのなかった作家について、また私自身も扱うことのなかった作家について調査することによって、さらには日本文化がフランス作家に与えた影響をより正確にそして広範に調査することによって、さらに深化させようとするものであった。私は特にこうした影響が各作家のエクリチュールに与えた変化を調査することが重要であると考えた。そして、こうした観点から最も興味深い例となりうると思われたのが、フランスの現代作家、ミシェル・ビュトールである。こうして、日本文化、東洋文化が彼に、特に彼のエクリチュールに与えた影響を調査することが本研究の中心的主題となった。本研究のもうひとつの目的は、これまで私が行ってきたフランス現代作家について、研究の全体像を示すことによって、２０世紀と２１世紀のフランス現代文学を通して見た日本文化という問題について、体系的とは言えないまでも、ある巨視的な視点を提示することであった。こうすることによって、「１．研究開始当初の背景」に記したような類型的なオリエンタリズム、エクゾティスムを批判的に乗り越えることが可能であると考えたのである。

３．研究の方法

様々な資料を図書館において調査し、その資料を分析した（たとえばフランス国立図書館における調査）。またミシェル・ビュトール本人を囲む形で国際シンポジウム「ミシェル・ビュトール　－　境界にて、あるいは移動の芸術」を開催することによって様々な論点について日仏の作家、研究者と議論した。またビュトール本人とも日本文化の影響の問題について繰り返し議論した。ビュトールはこうした観点から体系的に論じられることはなかったので、シンポジウムという共同研究の形をとることにより、問題の多面性を示すことができると考えたわけである。シンポジウムでは、日本の作家との議論をも準備することにより、特にビュトールのエクリチュールに与えた影響という複雑な問題をも正面から扱うことができると考えた。

４．研究成果

当初掲げた３つの研究目標がすべて達成できたと考える。まず第一には国際シンポジウム「ミシェル・ビュトール　－　境界にて、あるいは移動の芸術」を２００８年４月２０日、２１日に立教大学にて開催した。このシンポジウムには連日 50 名から 60 名、特別講演においては 100 人以上もの聴講者が集まり、文学専門誌のみならず、新聞にも特集され、大成功を収めたと評価されている

次に２０１１年１月にディジョン大学出版局から『ノマドのエクリチュール　－　フランス作家と極東』（『エクリチュール』シリーズ、１５０頁）というタイトルのもと、フランス作家の作品にみられるアジア文化の影響、特に日本文化の影響について、書物（論文集）刊行できた。

最後に上記シェル・ビュトール・シンポジウムの成果をもとに、その報告書の刊行を準備した。これは『ミシェル・ビュトール　－　境界にて、あるいは移動の芸術』というタイトルで、２０１１年４月にディジョン大学出版局（『エクリチュール』シリーズ）から刊行される予定である。

このような三つの目標（シンポジウムの開催、論文集の刊行、シンポジウム報告書の刊行）を実現することにより、日本文化のフランス現代作家への影響という問題に新たな視点を導入できたと考える。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

(1),Olivier Ammour-Mayeur 《 *OR - Les Lettres de mon père*, ou le message est… (sur Hélène Cixous) 》. In *Bulletin de la section de français. Université Rikkyo*, Surugadai-Shuppansha, Tokyo, 2009, 査読無 pp. 49-65.

(2),Olivier Ammour-Mayeur「『失われた横顔』の自画像、あるいは日本女性のような作家の小さな肖像(抄)」、『早稲田文学』、2008 年 大田出版、第 2 号、 東京、査読有 pp. 322-327.

〔学会発表〕（計６件）

(1),Olivier Ammour-Mayeur "De l'écriture du voyage à l'écriture nomade: une perspective postmoderne". Symposium: "Poétique du voyage: Ecritures francophones et postmodernité", Department of Comparative Literature, University of Paris 8-Vincennes/Saint-Denis - France, 18th, December 2010.

(2), Olivier Ammour-Mayeur "Le Parti pris des Différences Sexuelles (Derrida lecteur de Sarah Kofman)". Lecture at the seminare *"Diversités culturelles, Différences Sexuelles"*, Centre de recherches CREFEG/LF, Université La Sorbonne Nouvelle - Paris 3, Paris - France, 22nd, March 2010.

(3),Olivier Ammour-Mayeur "*H Story*, ou pour un "remake relevant" (sur *Hiroshima mon amour* et *H Story* de Suwa Nobuhiro)". Symposium: *"Les Orients de Marguerite Duras"*, University of Tohoku (Sendai) - Japan, 11th, September 2009.

(4),Olivier Ammour-Mayeur "Esthétique et politique du Manga : Usages et déplacements des rites dans la culture populaire japonaise". Lecture at the University of Toulouse - Le Mirail, in the Department of Comparative Literature, 20th, March 2009.

(5), Olivier Ammour-Mayeur "Shakespeare entre Nô et Kabuki : ou l'art dramatique élisabéthain cadré par Kurosawa Akira". Symposium "Shakespeare et l'Orient", Société Française Shakespeare, INHA - Paris, France, 14th, March 2009.

(6),Olivier Ammour-Mayeur "Les Indicibles du deuil, ou ce qui ne passe pas dans la *matité* de la langue (Ph. Forest - Tsushima Y.)". Symposium "Deuil et littérature", University of Clermont-Ferrand - France, 6th, March 2009.

〔図書〕（計５件）

(1),Olivier Ammour-Mayeur "Liminaire" ("Forword"), in *Michel Butor - À la frontière ou l'art des passages*, Co-editor of a collective book on the work of Michel Butor, EUD,《 Écritures 》, Dijon (April 2011), pp. 11-14.

(2),Olivier Ammour-Mayeur "La critique littéraire en profil perdu, ou petit portrait de l'écrivain en femme japonaise". in *Michel Butor - À la frontière ou l'art des passages*, EUD, 《 Écritures 》, Dijon (April 2011), pp. 149-155.

(3),Olivier Ammour-Mayeur *Écritures nomades : Écrivains français et Extrême-Orient* (編著), EUD (University of Dijon Press), 《 Écritures 》, Dijon, January 2011, 150 p.

(4),Olivier Ammour-Mayeur "L'U-topos de l'allégorie dans *Hiroshima mon amour*, l'œil cartographique de l'oubli". In *De mémoire et d'oubli* (Christophe Meurée & Pierre Piret eds.), Peter Lang, 《 Marguerite Duras 》 n° 1, Brussels - Belgium, 2010, pp. 267-284.

(5), Olivier Ammour-Mayeur “ ‘Alors comme un fruit mûr, le coup s’est détaché de vous’ : Henry Bauchau et l’esthétique zen du tir à l’arc”. In *Henry Bauchau - Ecrire pour habiter le monde* (Catherine Mayaux & Myriam Watthee-Delmotte eds.), PU Vincennes, 《 L’Imaginaire du Texte 》, Saint-Denis, 2009, pp. 273-291.

６．研究組織

(1)研究代表者

アムール＝マヤール・オリビエ
（Ammour-Mayeur Olivier）
立教大学・文学部・助教
研究者番号：20422181

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし